

Kダブシャインの

学問のすゝめ

Kダブシャイン

洗練された

文学的な

「韻」^{ライム}表現と

社会的な

「詞」^{リリック}の世界を

表現し続ける、

日本屈指の

“社会派

ラッパー”が、

日本の教育制度に、
そして現代社会に、

物申す

K
ダブルシャインの学問のすゝめ

K
ダブルシャイン

星海社

262



SEIKAISHA
SHINSHO

We must be free not because we claim freedom,
but because we practice it.

— William Faulkner

自由を主張するからではなく、
それを実践するから自由なのだ。

— ウィリアム・フォークナー

こんだけ終わってる時代に育てば

何が問題なのかの本質とらえた今

少しずつ見えては来てる答えが

十分な知識と思考力備えた

新しい価値観 新しい発想 新しい立場 新しい学校

次の世代に当然合わせた焦点

で逞しい男になっていく少年

この現実の影響で GENERATION NEXT
情報化の成功で GENERATION NEXT
この現実の影響で GENERATION NEXT
情報化の成功で GENERATION NEXT

——「GENERATION NEXT」キングギドラ（2002年リリース『最終兵器』収録）

この日本においてずっと一万円札の顔であった福澤諭吉。彼の書いた『学問のすゝめ』を今でもみんなありがたがって崇拜しているようだが、個人的にずっと疑問に思っていることがある。それはあの有名な「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という一節についてだ。

福澤はアメリカに行ったにもかかわらず、当時の奴隷制にまったく気づかなかったのかと不思議に思う。福澤がアメリカに渡ったその頃はちょうど南北戦争の直前であったのに、不思議だとは思うが、もしかしたら当時の福澤にはそういう部分が見えなかったのかもしれない（南北戦争は1861〜1865年。福澤がアメリカに渡ったのは1860年）。

自分が1985年に渡米して人種差別というものを目撃したとき、失礼ながら福澤諭吉の目は節穴だったんじゃないかと思った。そして、現代の日本人がなんでそんな人の言葉をいまだにありがたがっているんだろう、と考えるようになった。

それからアメリカで生活をするうちに、日本におけるアメリカへの固定観念についてや、アメリカ人にとっての「自由」とはなにか、そして人権や公民権など、彼らが大切にしている価値観に興味を持った。そこで約250年前に福澤諭吉が見落としたであろうことや、時が経ち、いまの日本で勘違いされてしまった解釈をあえてここで検証し直し、特に「学ぶ」ということについて現代向けに更新したい。それが運よく10代でアメリカに渡り、当時広まりつつあった「ヒップホップ」を現地で目撃することができた自分が、いまの日本に向けて貢献できることではないだろうか。

申し遅れたが、自分の名前はKダブシャイン。いまも昔もラッパーだ。1980年代の半ば、アメリカでヒップホップと出会い、ラッパーとしての人生がスタートし、いまでも辛いなこととそのキャリアを継続している。90年代の日本の音楽シーンにヒップホップはまだまだほとんど浸透しておらず、ましてや「日本語でラップ」するということについてはほぼ確立されていなかった。その状況下で、自分は日本語を駆使して、日本語でラップすることを、いや日本語でラップできるということを証明した。その自負は大いにある。

中学生のころから洋楽好きだった自分がブラックミュージックの中でも特にラップにハマったのは、都会的な雰囲気だけではなく、それまで聴いたことのなかったラップやスクラッチ、ドラムマシンの激しいサウンドや、スポーツブランドの服を上品に着こなしポーズをキメていた斬新なスタイルに、珍しいもの好きだった性格が敏感に反応したことがまずは大きかったと思う。そして、アメリカの学校に通い始めたタイミングで大ファンだったランDMCとビースティボーイズがMTVから爆発的にヒットし、その後の全米ライブツアー「トウギャザー・フォーエバー」も成功を収めた。

それをきっかけにアメリカの若い黒人と白人がヒップホップを通じて仲良くしていき、人種差別が少なくなるさまを目の当たりにしたことで、ラッパーが自分を含めた若い世代に現実を音楽に乗せて伝えることで世の中を変えられる可能性を持っていると感じ、「学び、知る」ことで世界が良い方向に向かっていくと信じるようになった。

その後続いたラッパーたちも「自尊心を持って」とか「地域を大切にしろ」というメッセージを歌にしたものを作り、貧しく機会に恵まれない場所に少しづつ希望を与える存在となることに感銘を受け、なれるものなら自分もラッパーになりたいと本気で憧れるようになった。

うちの実家は周りと比べても裕福じゃなかったし、いつも節約しろと親によく言われ、贅沢とはかけ離れた生活だった。特に幼少時は身体も弱く病気がちだったこともあって、医療費で貯金を使い果たしたと言われていたので、あまり物をねだることもなかった。

それでも「読みたい本がある」と言えば買い与えてもらえたとし、本屋にもよく連れていかれた。そして高校生になって「アメリカに留学したい」と言ったら、なんとかやりくりして希望を叶えてもらえた。たとえ家にお金が無く、母子家庭で後ろ指をさされたとしても、将来恥をかかずに済むようにできるだけ良い教育を受けさせてから世の中に送り出したい、と母親は考えていたみたいだ。

結果的に学校の勉強はあまり好きでなかったからか、学歴はそこまで誇れるレベルには達しなかったものの、いま人前に出ても大勢の人がそこそこの自分の考えや話に耳を傾けてもらえるくらいになれたのは、ひとえに「教育」というもののおかげだと思っている。

アメリカで暮らし、英語を使えるようになったことで、読むものの幅も広がり、いろいろな国の人たちとコミュニケーションが取れるようになった。世代を問わず外国の人たちがどんなことを考えているのか、何を大切にしているのかが少しずつわかるようになり、

異文化というものへの理解も深まった。そのおかげで違う角度からの見方も覚え、いまもなお多様な情報へのアンテナを高く保ち、感度も衰えずにいる自信がある。そうやって知ったことや考えたことを世の中に向けて伝えられているのも、そのおかげだ。

だからいまで言うところの「親ガチャ」ではないが、生まれや育ちの運が良くなくても、「教育」を手に入れることで視野が広がり、いくらでも自分の人生を良い方向に変えることはできる。

自分も「教育」のおかげでラッパーとしてのキャリアを積み、自分なりのメッセージをアートで表現しながらも、当時日本でほとんど認知されていなかったヒップホップを広め、そして「日本語でラップする」という扉を開いたことで何かの役に立てたとは思っているし、若い頃からの大きな夢が叶い、いまでも楽しくラッパーで居続けられている。

「社会のため」とか「人のため」というよりもまず自分を埋もれさせないため、自分の持つ可能性を伸ばすために、「教育」はすべてにおいての鍵になるということを、この本を手にとってくれた人へ、はじめに強調しておきたい。

何だつてやれる 何だつてなれる 夢見つけたら頑張つてられる
何だつてやれる 何だつてなれる 強く信じてれば頑張つてられる

いつも学校の勉強なんかイマイチいい先生たまにしかいないしって
思うんだつたら読書しな 本をいっぱい読む子には
嘘を見抜く目と力つく 好きな事発見したら普通

なぜか一生懸命やってくれる ナズも言つてた 何だつてなれる
スポーツ 音楽 映画スターでもケミカルなもん 手出すな

うまくいくはずの計画が 夢と逆 ホームレス生活だ

政治家 社長 医者 警察ら 大人でもちゃんとしてねえヤツが
いるからやる気ないのでよく分かる でもみんなでやれば良くはなる

何だってやれる 何だってなれる 夢見つけたら頑張ってもらえる
何だってやれる 何だってなれる 強く信じてれば頑張ってもらえる

——「ソンはしないから聞いときな」Kダブシャイン

(2010年リリース『自主規制』収録)

目次

はじめに 7

第1章

令和の教育改革が必要だ

21

なんでKダブが教育の話!? 22

日本の学力低下 24

受験に支配された日本の学校はいじめの温床 26

読書の大切さ 30

留学のすすめ 31

日本のエリート教育の問題点 33

リーダーシップとはなにか 35

日米の教育の違い 中学・高校編

リーダーシップを育てる教育 37

信仰や思想をないがしろにするな 39

信仰を持つとポジティブになる 44

アメリカには教室制度が無い 48

高校受験、さつさとやめるべき 49

権威主義と虚栄心 53

アメリカの学校生活 55

アメリカでできるんだから、日本でもできる 56

自立するための教育 59

日本にイノベーションが起きづらい理由とは 62

ディベートの授業 65

自分を愛せ 67

誠実であることとはどういうことか 69

「自分たち」という認識を持って 73

第 3 章 日米の教育の違い 大学編 79

大学という場所の意味 80

再びアメリカへ 81

ジャーナリズムを志す 84

印象に残っている授業 89

目の当たりにした黒人たちの運動 90

必修と専門、そして自分以外の日本人留学生たち 94

Kダブの進路選択 95

なぜ大学をやめてラッパーに？ 99

第
4
章

日本の教育に取り入れるべきもの

113

アメリカへの憧れと渡米 101

アメリカの大学生の就活事情 104

日本の学歴主義 106

甘えの構造 109

現代は「デジタル・シビル・ウオー」という乱世 114

日本とアメリカにおける「自由」という言葉 117

自由の教え方と「民主主義」について 119

民主主義をプラクティスしよう 121

自己表現 (Express Yourself) 123

アーティストたちの発信 125

公民権 (Civil Rights) 126

一般人ではなく市民になれ 127

語彙の探求 129

ヒト (Human) と人間 (Human Being)、個人 (Individual) 132

プライバシー (Privacy) 133

多様性を尊重するとはどういうことか 135

日本語における言葉のねじれ 136

アメリカの黒人たちへのエンパシー (感情移入) 149

自己責任とは 154

人の価値 156

第5章 死ぬまで独学のすすめ 157

拡大し続ける分断 162

優先すべきものを見失っている 164

現代は「ポリテイカルコレクトネス」の時代 166

「ブラックライヴズマター」への見解 169

認識違いの余波 171

自立なき自由はない 173

一生、学ぶ 177

勉強はコミュニケーションだ 180

知りたいと思ったことを勉強しよう 181

考えを深めることは無意識に委ねる 183

第

5

章

死ぬまで独学のすゝめ

ここんとこまわりを見回そうが
世界を見渡そうが

はつきり言つて地獄じゃねえか

早く目を覚まさないと

やられちまうぜ

ほら帰つてきたぜブーンバツプラツプ

俺らがつまんねえ分断碎く

時が経つてたつて空白なく

円熟味も増し風格アップ

韻踏んだ歌詞の文学書く

比喩にワードプレイふんだん上手く

考えを描写し順番歌う

ビートだつて常識つんざくヤツ

誤つた正義が街を放火

危険なソーシャルメディアの効果

繰り返されてる怒りの暴動

ただどこまで事実か怪しい報道

ブランド物だけ好んで略奪

すんのもポーズをとるとき役立つと

自分の住んでる地域を破壊

流されてる血はいつもより赤い

どこもかしこも Raising Hell

顔笑ってても目死んでる

ここもあそこも Raising Hell

地獄で生き抜く精神得る

そこでもここでも Raising Hell

冥土で魔女とウエディングベル

どこそこ構わず Raising Hell

これ未来よくする名人芸

拡大し続ける分断

ここ数年、急に世の中がおかしくなってきたことは誰の目からみても明らかだろう。それまでなかった現象が突然のように始まり、日常生活に変化を強いられたことで、将来への不安にさいなまれることが増えてしまった。それによりストレスが著しく高まり、他人への感情も過激になりがちで、意見や考えの異なる人、集団に対して反感を持つことが多くなったせいか、いわゆる「分断」というものが目立ってきた。

まずは日本に住んでいれば例外なく経験せざるを得ず、世界が同時に共有している大惨事、新型コロナウイルスによるパンデミックが生み出した分断が特に身近ではないか。2020年からの3年の間に状況は変化してきたものの、最初は誰もがこの感染症への恐怖に慄いていて、慎重に情報を集め、それぞれその人なりの理解に至っていた。大きく分けると、「とにかく怖いから予防に力を入れる」タイプと、「こんな病気は新しい風邪みたいなものだから恐るるに足らず」と無防備に対処するタイプに分かれた。

その後、国際的な保健機関や行政側の出す一定のガイドラインに従うことが常識になりながらも、世界中でロックダウンやマスクに関しての肯定派と否定派が激しく対立し、メディアでは否定派だけを非難する傾向が大半を成した。

そしてその間に出来あがったコロナワクチンも、はじめは「義務化しない」し、「子どもには必要ない」と言われていたのが、途中から同調圧力により「半強制的」となり、拒む者は職を解雇されたり、接種証明書やワクチンパスポートがないと海外渡航どころか入れない店や施設まで出てきて、世界各国の国民が注射すべきと毎日テレビ番組で喧伝する代物になった。

過去に類を見ないスピードで開発され、治験もまだ不十分な段階で体内に注入することを懐疑的に感じ、もう少し様子見しておきたいという慎重派や、自分の身体に入れるものは自分で判断すべきで、他者からの圧力で義務的に強要されることを、「主権侵害」と受け止める自由主義者たちはいわゆる「反ワクチン派」と呼ばれ、協調性のない連中とか、あげくの果てには何か背後に見えない力が働いていると思ひ込んだ「陰謀論者」がウソやデマを拡散し、世の中の不安を煽っていると異常者扱いをされるところまで行ってしまったのだ。

もちろん既存のマスメディアだけでなくインターネットやソーシャルメディアの影響も大きいのだが、それによって意見の二分化が対極的にエスカレートし、互いに中傷し合うことが当たり前のようにネット上で繰り広げられた。

本来、向き合い、乗り越えるべきものは今回のウイルスとそれによる被害であることは共通なのに、同じ被害者である私たちが考え方の違いで分断され、互いを敵視するのは本末転倒ではないだろうか。単純な情報の取捨選択や事実認識からの価値観の差が、相手をいくらかけなしてもいい「正義感」になるのはとても残念なことだ。

優先すべきものを見失っている

そしてこれと似たようなことが、2022年初頭に始まったロシアのウクライナ侵攻においてもあると言える。考え方や思想の違いで二分されているのだ。まずは、どんな理由があろうとも隣国に武力を持って侵攻したロシアだけが悪者であり、ウクライナの反撃によってロシア軍、及びプーチン体制が壊滅すればいいと西側諸国側の立場から見ている人たちがいる。またその一方で、ロシアがこの特殊軍事作戦に至るまでにはそれなりの経緯があり、長年のアメリカ政府からの内政干渉とウクライナ過激民族派による、ロシア系ウクライナ人に対しての弾圧が、ロシアとウクライナに、ドイツとフランスを交えた4カ国間で決めた「直ちにこの内戦を停止する」ためのミンスク合意が締結されたにもかかわらず未だに続いたこと、それ以外にも、冷戦終了後にロシアと欧米の間で交わされたNATO

軍は東方拡大を目論まないという約束も守られないどころか、新たに加盟国が増え続けている事実に対し、プーチン大統領が行動せざるを得なかったという判断に同情するスタンズの人もいる。つまり「悪いのは合意を守らないウクライナと、その背後にいるNATO軍だ」という立場だ。

たとえば実際にウクライナ支援をしてきた西欧のドイツやイタリア、そしてアメリカ国内でもロシアへの経済制裁が原因で起きた過酷な物価高や不況が悪化し、自国民が苦渋を強いられているというのに、ウクライナへの金銭的サポートや兵器供与などが際限なく継続していて、未だ停戦合意の交渉よりも「反撃の手をゆるめるな」と後方からの協力を惜しまない欧米各国の政策に対する市民からの不満は爆発し、各々の政府に向けた抗議の声は日を追うごとに大きくなっている。しかしそれでも「なんとしてもロシアを撤退させ、弱体化させろ」という意見も少なくない。

多数の犠牲が出ている軍隊や難民のためには、今すぐにも戦争を止めることが何より先決である。しかしそれをないがしろにする勢力がメディアを通じて、戦場の悲惨さや被害の状況、そこでウクライナ軍が善戦とのニュースを毎日のように報じ、兵器の供給で利益を貪る軍事産業が「ロシアは凶悪だ」と国際世論の反口感情を煽ることで現行の方針を

正当化している。このまま戦争屋がウクライナに軍事支援し続けることで、親ロシア派と親ウクライナ派がこの先もいがみあう対立構造を終わらせないようにしている。

日本の報道でも例にもれず、どれだけプーチンが独裁的でロシア国民が反発しているとか、病気で寿命もあとわずかだなんて一方的な情報を流すわりには検証の機会すら設けない内容ばかりで、日本政府がウクライナに寄り添うことがまさしく人道的という論調ばかりを流布する。いまのテレビはそれに共感しない者は人でなしとでもいわんばかりのプロパガンダ製造機となってしまうた。

またしても偏った情報によって改善されるべき問題が曖昧になり、ある一定の視点が刷り込まれる人と、あらゆる角度から観察し、能動的に分析しようとする人との理解の違いが生まれてしまう。たどりつく結論に応じてここでも分断が深まるし、それどころか地上波で流していない情報を主張する者を、本当なら中立であるべきメディアまでが、ここでもまた「陰謀論者」と切り捨てるので、分断はより加速的に進んでいく。

現代は「ポリティカルコレクトネス」の時代

これ以外にも記憶に新しいところでは、数年前のアメリカ大統領選や在任期間中の疑惑

に関するマスメディアの偏向報道ぶりに目まいがするほど驚愕した覚えがある。

まずトランプ前アメリカ大統領の当選が決まるとほぼ同時くらいから、この時もまた「ロシアが選挙結果を操作した」と対立候補者のヒラリー陣営が（後に虚構とわかる）告発をし、トランプ大統領の就任期間中も3年以上にわたり、ロシアとの共謀と選挙介入の疑いを追及し続けた。にもかかわらず、結局は証拠も示せないまま、今度はバイデン勝利の不正を疑うトランプ支持者を大手メディアは「悪魔教を信じるカルト集団（Qアノン）」と一方的に呼び、過去の自分たちの間違った報道内容は正すことなく、当時まだ現職だった国家元首を酷に扱い、応援する支持者らをひとまとめに「陰謀論者」と印象づけ、全くためらう素振りも見せず偏った訴えを続けていた。この一連の流れを数年見た結果、マスメディアこそ「分断」を作り出す主犯だと確信するに至った。

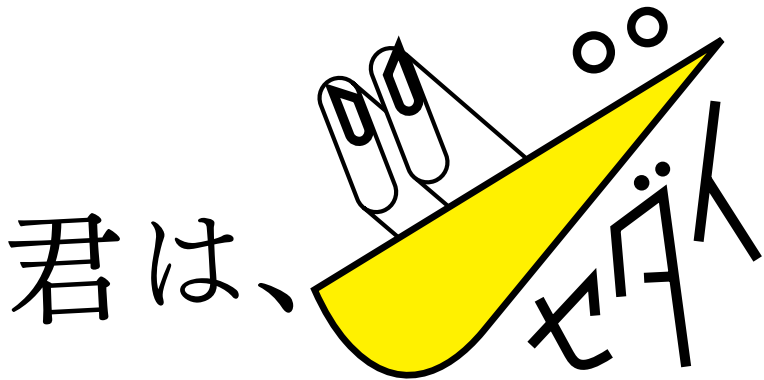
そしてそれを援護射撃しているのは私たちが毎日、愛着を持って活用しているツイッターやフェイスブック、YouTubeのようなソーシャルメディアと呼ばれるツールだ。民間企業である彼らが言論の善し悪しを判別し、「社会に悪影響」とみなす発言や個人を彼らの裁量で制限したり、追放したりできるルールになっている。

これによって運営サイドに「陰謀論者」と判定されたアカウントや発言は監視され、管

理されていく。一方的な風潮に異論を唱えることが少しずつ許されなくなっていて、常識とされた言説に一石を投じようと物を申すと、もうそれだけで懲罰の対象となるし、そのような存在をここでもまた狂人と見せることが可能となる。「言論の自由」を捨てた、なんて恐ろしい体制なんだと寒気を感じている今日この頃だ。

ところが皮肉なことに、この時代を後押ししているのは実は私たち自身でもあるという点も指摘しておこう。どういふことかと言うと、この数年よく耳にするようになった「ポリテイカルコレクトネス」という造語に責任があると言わざるを得ない。このフレーズを振りかざして他人の言動を「不適切」と告発し、過去にしたよくない行いをわざわざ見つけ「今から社会的制裁を与えろ」と、大勢の人が断罪しようとする傾向が爆発的に増加している。

好き嫌いを口にだせば「ヘイトスピーチ」、全てを受け入れなければ「差別主義者」と、他人からもメディアからも非常識扱いをされ、叩かれまくり、職を失うなんてことにも発展するのが「ポリコレ時代」の現代だ。



君は、ゼダイ人 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!